

## ヨハネの手紙第一 第4章 8節

「愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。」

秋晴れの下、陽が真上にある頃、母親と男の子が自転車で下り道を、ややスピードをあげて通る。男の子には白地に丸く黒いマークがちりばめられている。ハンドルを握る母の後ろの籠のようなところに乗っている。乗りながら周りをキョロキョロと見る。自転車のスピードの割には随分と自由な振る舞いである。安心しているから、スピードにお構いなしで見る。

安心と自由。誰もが手に入れたい二つである。この二つは対でなければ、どちらも本物にはならない。男の子の場合は、母親との関係から生まれた安心と自由である。親子が意図して、安心と自由を手に入れよう、そのような関係を持つようとしているわけではない。特に、男の子の年齢からして安心と自由、この二つのことを自覚しているとは思えない。母親が無意識に、そして無条件に注がれている愛情からうまれる関係だ。母親の存在そのものが土台となる関係がある。

存在そのものが、安心と自由を与え、しかもそれらが不変、不動、永遠である関係から生まれるなら、誰もが身を委ねたい。この関係を求めるお方が世界に自己紹介している。誰をも招く愛の関係性である。

2021年11月17日